

現代社会における“strangeness”の語られ方

聖カタリナ大学 徳田 剛

1. 目的

現代社会のありようを象徴するような言葉として「格差社会」「社会的排除」「個人化」などが用いられる。これらの用語が表す社会状況の基底には、現代を生きる人々の「個性」や「差異」(=strangeness)をどうとらえるか、という問題が存在する。本報告では、G・ジンメルに始まり現代に至る“stranger”をめぐる言説史を振り返りながら、一連の現代的な現象群の説明原理を明らかにしたい。

2. 2つのstranger論の展開と交差

strangerとは、何らかの社会集団の主たる成員がもつものとは異なる性質を帯びた者をさすが、古典期以来の社会学の系譜の中で、この概念は次の2つのとらえ方のもとに論じられてきた。1つは、有史以来の人間社会においてしばしば語られてきた以下のような言説である。すなわち、strangerとは(居住地・所属集団の変更や何らかの社会的なスティグマによって)当該社会の主たる成員たちとの共通特性を持たない者、あるいは持とうとしない者であり、社会内において攻撃や排斥の対象となったり居住区の設定や移動制限によって慎重な管理のもとに扱われたりしてきた人々とされる。この第1のstranger観を、「異質な者としてのstranger」と呼称しておく。

その一方で、近代化(とりわけ産業化と都市化)の進展に伴って、上記とは異なるstranger観が示されるようになる。かつてはstrangerの行動を規制しネガティブなラベリングを行ってきた血縁・地縁集団が弱体化し、高度な教育、自由な職業選択、居住地変更や所属集団の変更などを通じて、strangerとされてきた人々のみならず没个性的であったマジョリティ集団の成員までもが個性化し、社会全体の成員構成の多様性が高まっていく。大都市中心部のパブリックな空間で先鋭的に見られるように、諸個人の差異は、「異質性」や「逸脱」としてではなく「個性」や「才能」の発露、あるいは自由意志に基づく「自己実現」の現われとしてポジティブに、あるいは先入観や差別意識を伴わない形で扱われ、多様な個人がその差異や個性を保持したまま共存できる社会状況が現出する。このように差異化・個性化した諸個人がお互いのありようを容認(黙認)しながら共存するような社会の構成原理とともに語られる第2のstranger観を「見知らぬ者としてのstranger」と呼んでおきたい。

3. 現代社会におけるstrangerの位置づけ

stranger論の上記の2つの流れは、各時代の「現代社会論」のトレンドの影響を受けながら、次のような形で交差しつつ展開してきた。1970年から80年代においては諸個人がもつ「他者との差異」を強調し賞賛する思想的潮流(ポストモダン思想、コスモポリタニズム、多文化共生論等)が隆盛を極めたが、社会階層的にはフラットな位置にある諸個人が“個性的な”他者と並存するような社会観が主流をなし、strangerはかつての「異質な者」から「見知らぬ者」へと脱スティグマ化・脱マイノリティ化された人間像のもとに語られた。それに対し、とりわけ2000年以降の社会観やstranger観では、諸個人の多様性や個性が容認されその追求が引き続き推奨されるものの、本来は質的で「優劣」をつけることにはなじまない諸個人の資質が量的な価値(「市場的価値(いくらで売れるか)」や「効能(役に立つか)」)などに基づいてランク付けされ、社会的・経済的ヒエラルヒーへと配置される(しかも無視できない数の人々が「下層」もしくは「アウトカースト」に位置づけられていく)傾向が顕著となってくる。ここでのstranger観は、差異化・個性化の進行(第1から第2へ)という流れを引き継ぎつつ、同時に、価値中立的あるいは寛容や共生の下に平等に扱われるはずであった個性的な諸個人の相当数を「不適格」「劣等」「廃棄物」といったネガティブなラベリングと共に社会階層のヒエラルヒーの下層へと押し込めていく傾向(新たな「異質性」に基づく選別と排除)として説明できる。